

〈50周年記念講演会〉

『毛沢東崇拜から尖閣列島問題に至る、わが中国史研究の50年』

小林一美

★ [以下の文章は、神奈川大学「人文学研究所」における話を基にしながら、詳しく論旨を補強したものである。また「尖閣問題」に関する私の、中国人向けの発信は、当日お話しする時間がまっただけでなかったため、附録の文章で補うことにした]。

半世紀以上も昔の、少年時代、学生時代の体験を語ることは、なにか恥ずかしいことのように思える。しかし老いて語りたくなかった。私が若かった頃、尊敬していた祖父の論語に基づく人生教訓は身にしみた。父が出征しており戦死して帰れないことを想定して、祖父は父の分まで熱心に私を教育しようとしたのである。私は使命感をもって話す祖父以外の年寄りの話は単なる老人の懐古趣味のように感じられ聞く耳を持たなかった。しかし、自分が後期高齢者となって、過ぎし日を思うにつれ、若い諸君に教訓を垂れようとする心が年々強まってきた。昔の老人の気持ちが分かる年齢に達したのである。老人の話にも三分の理がある。

我が人生76年を振り返れば、世界の変転は凄まじく、まさに今昔の感に堪えない。日中戦争が始まった1937年、日本軍が南京大虐殺を起こした年に生れた私は、小学校2年生の夏に敗戦を迎えたが、それまでは「早く大きくなって、戦車500台を率いて、支那大陸を縦横無尽に駆け回る」ことをひたすら願い、早く軍人になる日を夢見て、毎日軍歌ばかり歌っていた。今でも数多くの軍歌を歌うことができる。

敗戦後の5年間、小学校時代の私は、ただ食い物に飢えていた。しかし、山谷を闊歩して自由気ままに生きる野生の力を発揮して、グミ、柿、一位の実、あまんどろ、桑の実、野苺、その他なんでもよい、何か甘いものはないかと山や村中を歩

き回った。老人の昔話などを聞く余裕はまったくなかった。しかし、今の私は、母の昔話が大好きである。私は、大正7年に信州の標高1200メートルもある山中の、たった30軒ほどの寒村に生れた96歳の母と、毎年半年は一緒に暮らして、昔話を聞くのが楽しみである。母の話によって、もはや日本人が永遠に回帰できない、江戸時代からの日本人の暮らし、特に信州の山深い世界に住み続けてきた山地人の原像が生き生きと再現できるからである。また、母が何回となく語る「戦後同級会を始めたが、富士見小学校時代の男の同級生はほとんど戦争で死に、何十年間も女ばかりでやってきた」、「4人も子どもがある夫とやっとな馴れた馬2頭を軍にとられた。あの馬はどうやって死んだか」、「裏の子だくさんの家に住む幼馴染、この貧困と障害もちの少年が徴兵されて、あつという間に戦死した」、「子供時代、小学校から帰ると、友達と沢庵を皆が一本まるごとつるして、かじりながら村中を遊び歩いた」といった話は、いつ聴いても心に残る。

さて、敗戦後、小学校時代に放縦の「自由」を満喫した私は、もう高校時代には社会主義、毛沢東に憧れる人間になっていて、自民党を押し父と政治問題でことごとく対立した。以後「世界史」の授業で習った革命中国は20数年間、私の憧れの対象となった。しかし、それから20数年後の1980年に初めて中国に行き、人民の驚くべき窮乏に愕然とし、中国革命への憧れと毛沢東への尊敬の念は急速に失われた。それから更に又、20年経ち、60歳を過ぎてから『中華世界の国家と社会』を書いて中国史を帝国史として書き直し、70歳過ぎに、『M・ヴェーバーの中国社会論の射程』を上梓して、中国人と中華帝国の倫理史的展開論を書いた。またそれと同時に5年前から毎日、『中共革命根拠地ドキュメント』という、

1930年代前期の党内大粛清の歴史を書き続けた。これは今校正中である(注、すでに「御茶の水書房」から出版)。晩年になって、青年時代に何も知らずに憧れた中共革命根拠地の「真実の歴史」の発掘に再度挑戦したのである。人生の前半に政治的幻想の中で積んだ積み木を、晩年になって崩しているのである。人の世とは何と不可解なものか。これが素朴な人生終末期の感慨である。どうも、人間とは、青少年時代に提起した問題を人生の宿題として持ち続け、それに一生かけて答えようとする動物であるようにも思う。

昔話に戻る。大学時代を思えば、次のようなことがあった。1957年に、私の幼友達の坂本昭君(東北大学工学部金属に進む)から「大学で何を勉強するのか」と聞かれ、「中国史だ」と答えると、「それは何の役に立つのか」とびっくりした顔で聞かれ、うまく答えられずに大いにとまどった。冷戦時代の科学技術系の日本人には、「共産中国」などは未来の日本が進む御手本ではなく、豊かな欧米先進国しか目標ではなかった。私も、高校同級生の伊東君(一橋大学の経済学部進学)に「大学で東南アジア経済」を勉強していると言われ、大いに驚き「そんな後進地域を勉強して一体何の役に立つのか。彼は、きっと経済学部の中で成績が一番悪いのだろう」と思ったものだ。坂本君は、1960年代に三菱重工の航空部門に進み日本のロケット第1号の準備段階にたずさわった。彼は、最初アメリカに出張した時、飛行場を出て前に止まっていたバスに乗り込んだ。ところが、「有色人種」だと言われて「黒人専用バス」に追いやられた。この人生最大の屈辱を受けた坂本君は、1980年代以降に、アメリカの「溶接学会賞」を2度受賞し、和服姿の奥さんを伴って晴れの授賞式に出席した。黒人を奴隷にするという人種差別の超大国だったアメリカは、今や黒人のオバマを大統領に戴いている。有為転変する人と国の運命は、誠に分からないものだとつくづく思う。学生時代には、今の日本や世界の状況など全く予想できなかった。何という変化であろうか。人類の地球一体化、世界共通化にただ驚くばかりであるが、一方でイラク・アフガニスタン・エジプト・シリアの戦乱とアルカイダ・タリバン問

題に見られるような憎悪と復讐に明け暮れる、人間の愚かさ、変わらなさにもまた驚いているのである。人の世には変わるものと変わらないものがあるようだが、本当の意味で賢くなったとは全く思えないのである。

人間が身につける知識・教養の分野には2種類があるように思う。一つは体験的・生理的に受け取る知識・倫理——主に家庭で幼少期に受け生涯にわたり大きな威力を持つ礼儀・儀礼・風習・習慣・習俗や共同体の規則や規範から受ける倫理的知識であり、これは幼少期に同じ生活体験をし、同じ家族や地域共同体に生きないと身につかない感性的な人間の文化である。もう一つは学校教育で外部から与えられる理知的な知識——主に学校教育・辞書・インターネット・スマートホンなどで受ける客観的知識であり、これは記憶力が優れていれば受け継ぐのは簡単である。前者は「体験から得て生理化する」文化なので伝えるのが難しいし、入学試験や資格試験に全く出ない。この生理にまで食い込む知識の伝承は三代、60年が限界であろう。最近の日本人は、体験的知識の欠損が極めて激しく、家族と民俗と共同体の記憶の劣化が顕著である。少なくとも三代60年間の記憶を呼び戻すことが大切だと思う。例えば、戦前の日本人の記憶は、江戸時代から祖父母・両親・子供の三代60年、三世代同居という単位で伝承されてきた。最近の日本人には、もはや三世同居の家庭は少ない。子供は1人か2人である。夫婦は年間20万組以上が離婚をし、親は70万人のニート・準ニートをかかえている。一人暮らしの世帯が30パーセントを越え、65歳以上が4人に1人である。結婚しない青年が激増しており、家族は基礎共同体とも云えないほど劣化している。今の若い人には家族・共同体からの強力な文化は希薄であり、1960年代からの記憶しかない人が多い。だからこそ、あえて敗戦後からの60数年の歴史を1単位として学ぶことが大切である。

我々の世代は、今のような豊かな情報がなかった。家族と地域共同体からくる知識がなかった。私は中学3年生まで、暮らしている八ヶ岳南麓にある落合村が全宇宙であった。私の個人史から言えば、敗戦で国家社会の権力、権威がなくな

った子供時代・少年時代には、学校の規制を受けることなく、自由気ままに生きる力を養い得た永い時間、山谷を跋渉して得た野生の知識を享受していた。それはすべて村宇宙の中だけの体験だった。しかし、小中校時代には、友人達と毎日10キロほど山野を気ままに歩きまわっていた。東京には大学進学まで一度も行ったことはなかった。逆に今日本で活躍している人は、村社会の体験がない。三世代同居、村宇宙の体験がない。今、官界・マスコミ・学界で活躍している中堅の人々は、だいたい1950年代以降に生れた人々であり、1960年代以前についてはほとんど経験的には何も知らない。戦中戦後の人々の生活感覚、野性的な体験がまったくないのである。

戦中から戦後十年くらいの時期には、今の日本人が想像もできないほどの波乱万丈の人生を送り、万難辛苦を乗り越えた「本当に偉い人」、「真の苦勞人」と思われる人が数多くいた。私が学生時代に少し接したそうした人々の多くは、戦争から帰って左翼になった人々だった。今、戦後左翼を嘲笑するだけの学界・政界・官界や論壇で活躍している評論家の言動は、戦後左翼より遥かに滑らかであるが、軽くて薄くて短くて実に頼りない。

個人の人生、国家社会の制度や文化の寿命は、平均すると三代60年前後ではなかろうか。「60年1サイクル説」を提起したいと思う。人生も、よく活動できるのは約60年である。家は三代60年、国家は新体制の確立からその制度劣化までの時期がだいたい三代60年前後であろう。家三代で滅ぶ、三代目の馬鹿息子、30年で小反乱、60年で大反乱、等と中国の諺にもある。日本は、1868年（明治維新・明治元年）から1937年の日中戦争開始までが68年。明治から敗戦の1945年までの大日本帝国体制の寿命は77年。戦後は、1945年から2011年3月11日の「福島原発事故」までが66年。中国はアヘン戦争の1840年から辛亥革命の1911年までが71年。それから1949年の社会主義革命までが38年。それ以降、現在までが64年である。中華人民共和国に限れば、毛沢東時代が約30年、対外開放以後が約38年である。合わせて中共独裁の歴史は68年間である。今日中国社会主義の理想はまったく色あせてい

る。ロシア史は、1861年の農奴解放から、ロシア革命までが56年、ロシア革命からソ連の崩壊までが74年である。今や、プーチンは、ロマノフ王朝の新皇帝きどりであるが、道化師のようだ。北朝鮮のキム王朝は、1945年の建国から現在までが三代67年である。アメリカは、共和制国家成立の1787年から1861年の南北戦争までが74年、それから第一次世界大戦が終わり、世界第一の国家になった1919年までが58年、第二次世界大戦に勝利し、原水爆国家として世界に君臨した1945年までが27年、45年から現在までが68年である。大統領は白人優越主義者から黒人へ変わった。昔は、「国家100年の大計」と言ったが、今は時間が加速しているので、人も国家も「30年の計」あるいは衰退の30年を合わせて「60年の大計」を建てるべきだと云いたい。細かく言えば、上記の説に異論は多いと思う。しかし、現在の日本人には、敗戦後からの60年間をしかと振り返っていただきたいと強く言いたのである。最近の日本人は、戦後の「右肩上がりの良き時代」に対して、1990年代からの「失われた20年」の「悲劇・困難」を強調する。過疎化、経済の第3位への転落、格差社会、大学生の就職困難、非正規雇用の増大、自殺者3万人超の恒常化、生活保護受給者の200万人突破、将来の不安等々。76年間生きてきた私の印象は、全く違う。歴史認識の単位を戦中戦後からの約60年間に延長して頂きたい。死者310万人を出したアジア太平洋戦争の悲惨と戦後30年間の混乱と貧窮の時代、ある意味では自由気ままを謳歌した時代、このあらゆる権威が否定されて「君が代」が日本から完全になくなった、あの解放感に満ちた時代まで遡って認識して頂きたいと思う。

再び私の戦後60年間の歴史を振り返ってみよう。戦後は、日本軍国主義に対して最も勇敢に闘った日本共産党員、労働運動指導者、弾圧に抗した知識人、学生運動家などが大きな権威と勢力を誇った時代だった。私にとって戦後30年間は物質的には実に苦しい時代だった。しかし、飢えと不思議な解放感の中に新しい生きがいを感じていた。一方で、小学校6年生の頃に朝鮮戦争が始まり、以後インドシナ戦争、ベトナム戦争へと続い

た。この時代は、冷戦が激化した時代で、米・英・ソ・仏・中による原水爆実験が2000回も行われ、3度目の世界戦争が起るかもしれないという恐ろしい恐怖の時代だった。敗戦後、氏神様の白壁に墨で黒々と「天皇制打倒」の大きな墨の字が躍っていたのをみて、異様な衝撃を受けた。その後、高校時代に社会主義思想の洗礼を受けた。高校時代、フランス革命のパリ、ロシア革命のモスクワ、中国革命根拠地・中華ソヴィエト共和国の瑞金は、憧れの聖地になった。冷戦の恐怖の中でも1962年のキューバ危機は最も恐ろしかった。生理的な恐怖にまで達した。それで大学院マスター時代、東洋史学の友人5人でアメリカ大使館に抗議に行った。驚いたことに、アメリカ大使館は我々を豪華な部屋に通し、二等書記官が会い、われわれの抗議文を必ず本国に伝えると云った。英語で反論されたら困ると実は内心ヒヤヒヤしていたが、その書記官は日本語で話したので、ホッとしたことを覚えている。予想外のアメリカ帝国主義の、懐の深さに驚いたものだった。

私の戦後30年間の日本史に関する私の認識は、百姓一揆、自由民権運動、秩父事件、大逆事件、日本常民史、日本残酷物語等々にのみ限られていた。江戸近世文化論、花開いた江戸時代論には全く関心がなく、私にとっての江戸時代とは、日本の歴史の中で最も身分差別が徹底的に進んだ時代、もっとも百姓、エタ、非人が搾取、抑圧された100パーセント否定すべき純粹封建制社会、徳川幕藩体制の時代に過ぎなかった。アメリカのライシャワー大使は、日本の江戸時代を世界でも珍しく高い町人文化、職人文化が花開いた「日本の近世」と高く評価した。これに対して、我々は、「ライシャワーの文化攻勢」であると言って、警戒した。これは、1966年前後に、私が歴史学研究会の委員だった時代の日本左翼学生知識人に共通した感情であり態度であった。しかし、アメリカ大使館に我々学生まで入れたのは、ライシャワーの外交哲学「反対派、左翼とも率直に語れ」に添ったものであったと、最近知った。

何故戦後すぐ、日本の知識人・学生はアメリカ帝国主義を非難し、「江戸近世説」に反感を持ち、また一方で中国など社会主義国に大きな期待を持

ったのか。その発端は、日本人は戦後になって初めて日本の戦争指導者と日本軍人の野蛮さ、愚かさ、及び日本軍が行った侵略戦争の残酷さ、朝鮮や中国、東南アジアの民衆に与えた被害の大きさに驚愕したからである。また、靖国神社に祭られていると言われる第二次大戦での日本軍人犠牲者200万人の過半数は、日本の為政者と軍事指導部によって戦場で餓死させられたり、無為に殺されたりした人々であった（藤原彰『日本の軍隊』等々）。こうした事実を初めて知り、驚愕し、日本近代の道を野蛮な「半封建制・半資本制的近代」の道として否定せざるを得なかったのである。大半の日本兵士は、日本の政府と軍部によって殺されたのである。この戦争の野蛮さ、残酷さと言われなき民族優越主義に対する反省こそが、社会主義に期待し、毛沢東・八路軍・中国革命に期待と幻想を持つ、私達のような戦後の世代を生み出したのである。

毛沢東と八路軍がいかに誠実であるかといった戦争中のエピソードは、旧軍人を含めて日本で大いに喧伝された。そうした情報に接した私達の高校・大学時代は、日本近代の道は全面的に批判されるべき、いや「否定されるべき」道となり、その分社会主義や共産陣営の株が比例して上がった。朝鮮戦争・ベトナム戦争によって、アメリカは日本の再軍備を促し、日本をアメリカ帝国主義の世界支配の一環に組み入れようとしていると強く感じられた。1960年代の学生運動や労働運動の高揚は、こうした内外の情勢に対応するものである。しかし、この高揚は1968年を境にして退潮に向かった。戦後左翼の運動は、日本を冷戦を戦うアメリカの完全な前線基地にすることを抑止した。

戦後の国民的雰囲気完全に転換したと感じたのは、1970年代の前半であった。赤軍派のよど号ハイジャック事件（70年）、イスラエルのテルアビブ・ロッド空港乱射事件（72年）、連合赤軍事件（72年）などという極左事件が連続して起り、国民は驚愕して子弟を諸々の運動から隔離した。極左組織は孤立して内ゲバに明け暮れて自滅した。かくして、総ての学生運動、労働運動、反戦運動は70年代に一気に消滅した。ここに戦後

日本の「前半期 30 年」は終わったのである。一方、1970 年代の中ごろ、日本と中国は国交回復（72 年）し、ベトナム戦争はサイゴン陥落によって終結（75 年）し、アメリカは東南アジアで大きく敗退した。また 76 年、毛沢東と朱徳、周恩来が死んだ。文革は無残に失敗し、中国は資本主義国に援助を求め「対外開放」に向きを変えた。また、1979 年ソ連は、アフガニスタンに侵攻した。かくして第二次大戦後の冷戦体制は根本から変わったのである。以後、日本資本主義は爆発的に発展し、学生運動・労働運動は完全に敗退した。以後、後半の「30 年期」が始まったのである。1980 年代、日本は繁栄の頂点に向けて驀進し、中国はまだ 13 億人が極貧状態だった。1980 年、真っ暗闇の上海空港を出発して、ギンギラギンに光輝く関東平野を見下ろした時、私はかなり誇らしく感じた。間違いなく私の戦後精神史はここに完全に終わったと実感した。以後、私は 80 年代から 90 年代の前半まで、中国史に何の価値を見出せばよいのか全く分からなかった。階級闘争史や社会経済史中心主義から脱却して、むしろ精神史、倫理史に転換すべきではないか。15 年以上迷って浮遊状態であった。過去、私の中国史研究は「マルクスの段階的發展史観」、「アジア的停滞性理論批判」、「中国人民闘争中心史」・「中国社会主义擁護論」であった。これはマルクスの責任ではない。マルクスを俗流化してきた私の責任である。これと決別して、90 年代以降、「中華帝国史」の運動法則、「中国政治倫理史」、「毛沢東の革命史」の特質研究へと大きく転換せざるを得なかった。

ここで話を今の日本に戻す。私の 76 年の日本戦後史で、今ほど豊かな時代はない。すでに「幸福」は 1980 年代に実現されていたのだ。過去形で語られる事柄である。あらゆる幸福の世、幸福の時代にも終わりがある。何事にも終わりがあるように、日本の「単独繁栄」の時代も終わったのだ。満つれば必ず欠ける。繁栄は墮落の始まりである。今は、「幸福の時代」の宴（宴は、いつでも何らかのバブルを伴う）のあとの衰退の時代である。200 万人以上の人が、1000 兆円の借金を気にせず生活保護費を与えられ、治療費を免除さ

れるよき時代（？）である。日本人の多くは、過去の栄光を懐かしみ、昔は右肩上がりの時代であった、今は寂しい、貧しい、1 人暮らしで悲しいと云う。一方で、青年たちは、過去の栄光など知らないと云う。彼らは、今は少子化、過疎、人口大減少、債務国への転落、就職難、老人の優遇、厚生年金と国民年金制度も危機、格差社会の進行、今の若者は可哀そうだの大合唱である。マスコミは、悪者捜し、犯人探しに熱狂している。クラスの誰がいじめたのか、いじめた生徒のアンケート探し、先生と教育委員会は知らなかったのか、日教組の教育が悪かったのだ、「君が代」を歌わない先生は誰だ、国が衰退したのは官僚が悪かったのだ、小泉、小沢、鳩山、菅が悪かったのだ、また領土問題では韓国人が悪い、中国人はもっと悪い、の大合唱である。「福島原発事故」の責任は、菅首相 1 人を喰いものにし、生贄にささげて終わりにした。大津波を予想して来たるべき全電源喪失への対策を立てなかったという驚愕すべき歴史の責任を誰も取らない。こうした世相を見て来ると、まさに戦後の国民国家日本も「60 年で衰退・崩壊する」という、国家社会の運命の一般法則から逃れられないでいると云わざるを得ない。日本人の「民心劣化」による「被害妄想拡大化の法則」は、家族と地域社会の大崩壊と軌を 1 にしている。戦後、国民国家を立ち上げた日本人が 80 年代を頂点にして急激に劣化したから、韓国・台湾・中国・東南アジアの国々にもチャンスが生まれたのだ。これはアジアで日本独り勝ちの時代が終わったこと、日本の国民国家の時代が終わったこと、まさに国家を遥に越えて、地球を一体化し、人・物・金・技術・エネルギー・情報が動き回る「世界市場」が出来あがったことを示している。欧米諸国と日本がコケレバ、他の国が興る、これは自然の法則であろう。私が考えるに、日本は戦後 60 年間に官僚制社会、縁故世襲社会、学閥社会の 3 つの社会病態が重なり合い、絡み合ってそれらは既得権益層を形成し、社会は窒息状態になっていると考える。ごく一握りの有名高校・有名大学・名門出身者が団子になって社会に寄生し、特権集団となって国家社会を喰い物にしているのである。ごく少数の有名私立中学・

高校の卒業生が、日本の頂点を独占し、政・官・財・学とマス・メディアの中樞を牛耳って久しい。首都圏の有名高校22校の出身者が、東京大学入学者の5割に達している。東大合格者第1位の座を日比谷高校から奪った開成高校は、毎年200人近くを東大に送り込み、すでに35年経過した。東大の学部4年間だけで開成高校の卒業生がいつでも700人以上占めているのである。東京都内の高校20校だけで毎年東京大学入学者の3分の1を占め、それに埼玉・千葉・神奈川の東大合格者を加えると、入学総員の半分の1500人に達するのである。顔見知りの日暮里、本郷、霞が関、丸の内、東京しか知らない秀才少年、受験エリートが、一生涯持ちつ持たれつしながら北海道から沖縄までの全国を支配、管理、統括しているのである。ちなみに今年の沖縄出身の東大合格者は7人である。また、東大医学部定員百人の内、某高校1校からの入学者が定員の3分の1弱を占めている。中高校から同じ空気を吸っていた同窓会的結合が権力機構に大量に流れ込んでいる。私の故郷の長野県の諏訪地方の私の母校でもある一高校から戦後60数年間に東大に入った学生は300名を越えるが、卒業後就職で故郷に帰った人はほとんどない。人材に対する首都圏の地方収奪も又激しいのである。戦後60数年続いてきた、日本の諸々の権力集中構造のこうした社会的病態の進行については、いつか詳しく分析したい。東京繁栄して日本減ぶ、の観を強くするのである。不思議なことに上記のような不公平で偏頗な社会病理の進展についてマスコミは全く論評しない。

又次のような事態の進行もある。まだ飢えていた1970年代以前の約30年間の方が、私や日本の学生・知識人の世界史的関心、世界の動向への参加の気持ちは極めて高かった。逆に70年代中期以降の日本資本主義の爆発以後、日本人エリート層の世界に対する関心は極端に低下した。これは何故かという問題を考えなければならない。戦後、日本の多くの学生・知識人は、「後進的な日本、半封建半近代の日本を根本から変革し、世界史の先端に追いつかなければならない」と強く感じた。その中から赤軍派のような「鬼子」も生まれた。しかし、80年代以降の日本人は、「すでに

世界の先頭に立った」のだ、「外国に日本が学ぶべきことは少ない」として「内に籠もる」時代に入った。日本人は急速に保守化して、野郎自大となり、90年代初期の「バブル崩壊」の時代を迎えることになった。以後、20年近く「日本人は、世界と日本の間を漂流し続けている」。もはや先進諸国の何処の国も、国民国家の黄昏の時代を迎えている。黄昏の国民国家に確たる国民的基盤はもはやない。だから、弱い日本人は「日本を取り戻す、強い日本を作る」という安倍首相に最後の望みをかける。世界に打って出る時代から、内に引き籠り外に向かって吠える日本人が多くなった。しかし、これからの日本人は新しい時代の精神を生み出さねばならない。我々日本人には「半ば世界人として生きる賢い日本人」となることが求められている。日本人の弱点は、「日本人は短期の目標はよいとして、長期のビジョンや夢をもつのが苦手だと感じています」（山中伸弥）。もはや、日本国（人）対中国（人）、日本国（人）対韓国（人）、といった対抗国家・対抗民族論の地平を越えなければならない。世界の中の日本人として賢く生きる道を捜さねばならない。

メダカのように集まって、何の役にも立たない目先の細かな相談ばかりするのをやめ、「孤高の地平」に立つ必要がある。特に文化系の研究者は、群れても何の役にも立たない。研究会、シンポジウム、学会などは、多くが時間の無駄のようにさえ思える。かく云う私も40代までは大いに学会、シンポジウムを企画し、主催したが、むなしさだけが残った。

しかし、日本には昔は孤立を恐れず、大学と都会から「都落ちして」、70年もかけて、長野県の農村医療に取り組み、この地の農民、山民の極めて短かった寿命をほぼ世界一にまで延ばした、若月俊一・今井澄・鎌田實のような人々もいた。これに反して、現在の日本の多くの人文系の学界、学会は、同窓会に近く、縁故をもとめて派閥で情報交換する就活の場になっている。昔の日本の本当に偉い人に学ぶことは多い。農村医療に尽力した、彼らを中国人を始め多くの外国人に紹介したいと切に思う。若月氏の著作は、中国語訳がすでにある。

チャーチルの言をもじって言えば、「遠く、広く、深く歴史を振り返れば振り返るほど、遙かに確かな未来が見えて来る」のであり、現在のように急激に万物が変転万化する時ほど歴史から真剣に学ぶべきであろう。こうした考えで、尖閣列島を巡る日中対立危機の時代に中国の友に向かって積極的に発言することにし、以下のように3回にわたって中国人への呼びかけを行った。私の中国人に対する発信は、日本の国益のためではない。国民国家日本の黄昏の時代を積極的に肯定し、偏狭な日本人を克服し、国際主義者である「日本人」たらんとする積極的な「意思」からである。と、本人自身は思っている。国家や民族の枠を越えて、個々の人間同士のつながりを第一にしよう。私の人生70数年を通してみれば、後期高齢者となった現在の私の最も親しい友人は、日本人よりも中国人のほうが圧倒的に多いことに、今更ながら驚くのである。

附録

[講演では御話しできなかったので、以下に日本人の中国史研究を長年にわたって中国史研究をしてきたものの責任として、「尖閣問題」に関して中国人に発信した私（たち）の呼びかけ文を附記したい]。

①「中国・韓国・日本の友人、及び世界の各国の友人に送るメッセージ」（小林一、嶋本信子両者の署名文、日本語・中国語・韓国語・英語で数十人に発信）2012年10月1日

昨今の日・中・韓の3国間の小さな無人島を巡る紛争、対立は、憂慮に堪えないことです。土地や島を取り合う領土紛争は、人類史上、たかだか数千年前に始まり、それは国家、都市、村など大小の共同体の誕生の時から現在に至るまで延々と続いてきました。そうした意味で実に通俗的で、陳腐で、何処にでもある問題であります。しかし、これは、あまりにも恒常的で終ることがなく、更に大きな戦争を絶えず引き起こすと云う点で、人類最大の難問、難問でもあります。領土紛

争ほど戦争の原因になるものは他にないからです。東アジア世界の歴史を振り返ってみると、たかだか数千年前には、国家と呼べるようなものはどこにも存在しなかったようです。その頃、東アジアの全人口は1000万人を越えなかったでしょう。殷周代の中国には数十数百の国があり、領土を巡って争っていたと云われています。農耕文明の誕生と発展は、人口の急激な増大をもたらし、土地と資源の争奪戦が始まったのです。

人類学、考古学の成果によりますと、今の、日本、中国、韓国、ベトナムなどの国民の祖先は、数万・数千年にわたってともに交流し、移動し、交換し、混血を繰り返した共通の祖先にあたる人々だったようです。しかし、3000年ほど前から東アジアに文明化の時代が始まると、土地、資源、エネルギーの大量消費と都市化による人口爆発がおこり、次第に戦争を生み、拡大させてきました。特に近代資本主義の時代に入ると資源と市場を求めて大規模な侵略戦争が地球全体にまで広がりました。それに続く帝国主義戦争の時代には、植民地獲得競争の中で、日本が最初に台湾、韓国に侵略し、日清戦争、日中戦争を引き起こし、近隣諸国の資源、土地を奪い、人命も大いに損なったのです。日露戦争の評価はいろいろ分かれていますが、清国の領土で戦い、互いに他国に利権を拡大する戦争でした。かくして、台湾・韓国朝鮮・中国など近隣諸国の人民から、歴史問題として今日に至るまで大きな恨みを買っているのは当然であり、日本人は深く反省すべきだと思っております。

先に述べたような人類史の数千年間の展開と領土紛争の起源を見れば、海中のどこかの小さな無人島が現存のどこかの国家の「古来疑いようのない、固有の領土である」などと云う論理は、間違いであることは明白です。国家などは、たかだか数千年前に生れたものにすぎません。大陸、土地、島は本来地球上に住むすべての生命体、生物の共通の棲み家であって、人間はたまたま「一時的にお借りしている」に過ぎないのでしょうか。人類だけが永遠不滅に繁栄し、特定の現存の国家が特定の土地・島を永遠に独占する権利があるなどと考えるのは、傲慢であり、他の生物・生命体の

尊厳に対する冒瀆でもあります。また、全植民地を失った戦後の日本が、戦前より平和を享受し、また繁栄した事実をみても、領土の広大さが国家の繁栄を保障するものでないことは明白です。21世紀の世界は、紆余曲折を辿りつつも、世界連邦に進むでしょう。それ以外に、百億人に迫る膨大な人口を擁し、驚異的なエネルギーを必要とするに至った人類に未来はないからです。

日本には、7世紀まで「日本」と言う国家は無く、以後各地に初期国家が生れ、それが統一され以後徐々に「日本」なるものが生まれ来ったのです。明治維新以後に生れた大日本帝国は1945年に滅亡しました。韓国朝鮮は日本の敗戦と共に復活再生しました。中華人民共和国は1949年に誕生しました。「中華民国」は、台湾に現存しております。あらゆる過去にあった国家は、皆滅亡しましたし、現存の国家もまた永遠ではありません。マルクスは「国家の死滅」を予言し、また「万国の労働者よ、団結せよ」と言って、国際主義の旗を高く掲げました。毛沢東は「始まりがあれば、終わりがある」とか、「1が分かれて、2になる」と言い、総てのものが永遠に存続することを否定しました。「大同世界、共産主義」の理想と「排外的愛国主義」は、互いに敵対関係にあり、全く対極に位置するものです。

あらゆる島の紛争は、当事者国家が話し合いで解決するか、国際機関での主張、審査によって帰属や利用を決め、問題を解決すべきです。日本は、憲法で「国際紛争を武力の行使によっては解決しない」と世界人類に誓っています。今回の紛争を契機に、日中韓の3国が、島を巡る領土紛争を契機に軍備を高め、戦争を繰り返す愚かさを再現してはならないと考えます。歴史家は、数百年、数千年の単位で人類史を顧み、歴史的経験から学び、過去との対話から得た「知恵、経験」を未来に向けて語り、東アジアの平和に向けて努力すべきでしょう。暴力と戦争によっては解決しないどころか、より大きな悲劇を生み出すことになるのは、これまでの歴史の教える教訓です。東アジアの平和と繁栄、この第二次世界大戦後、60年余続いた東アジアの平和と繁栄と自由な人々の交流を守ることは、これまでの東アジア諸民族の

歴史を研究し、互いの文化遺産と経験から多く学んできた、われわれ日中韓3国の歴史家の務めであり責任であると考えます。以上縷々述べてきた人類史の展開と東アジアの歴史に基づいて、私たちの知見と希望を述べ、近年の領土紛争の解決に向けてご努力を願い、且つ中国・韓国の歴史家および知識人・学生、さらに今日の事態を憂慮される全世界の方々への連帯の挨拶とさせていただきます。(終り)(注、この文書は主に中国大陸の友人、知人、学生数十人に発信。転送され数百人に読まれたと推測)

②「中国の友へ(」7人の会) 2013年2月23日。この「呼びかけ文」(日本語・中国語で数百人に発信)は、東方書店の雑誌『東方』(2013年7月号)に、全文と佐藤公彦氏の解説文が紹介されている。ここではその一部を紹介する。

■友人の皆様へ

「日中両国の領土をめぐる紛争を憂慮する中国史研究者の声」

寒さ厳しい季節ですが、先生にはお元気でご研究をお進めのことと拝察いたします。

日本と中国は親しい友人としての間柄を結んでおり、今後もそのようでありたいと強く願っております。そうであるだけに、今般の尖閣列島をめぐる日中両国間の紛糾と緊張をわたしたちは深く憂慮しております。

わたしたちは過ちはくり返してはならないと考えております。近代以降、日本と中国は、それぞれの道を歩んできましたが、それは両国間の不幸な関係をはらみながら展開してきました。日本では、軍部・政府が、新聞報道や学術・出版など各方面で情報を極端に統制制限し、国民に一切を知らしめず、ショーヴィニズム(沙文主義。排外的愛国主義)を引き起して侵略に踏み出し、その結末として未曾有の全面戦争に立ち至るという大きな過ちを経験しました。日本国民のみならず、世界各地のすべての国民が、この負の歴史的経験を共有されることを、わたしたちは心から望んでおります。

日中戦争・太平洋戦争後、わたしたち日本人は戦争の反省に立ち、諸国民の公正と信義を信頼して、平和憲法の下に近隣諸国、世界の国々と平和的・友好的に交際し、自由と平和を希求しようとしてきました。もちろん、この間に、戦争の処理に十分なる解決がなされたと或いは言い得ないかもしれません。しかしこの数十年間、日本国民が真摯に平和と友好を求めてきたことは歴史的に否定し得ない事実であります。中国の人々が近現代の苦難・桎梏からの解放を求め、苦闘を繰り返されたことは、ここに名を連ねたわたしたち中国史研究者が共有する学問の原点であり、深い敬意を払うとともに、日本がその苦難の歴史に大きな責任を負っていることも明確に認識しています。

わたしたちは、何よりもまず、両国間の平和と良好な関係は永遠に維持されなければならないと思います。これは近現代の歴史がわたしたちに強く教えるところです。見解の相違はあります。感情の齟齬もあります。しかし、「アジア」の近隣に住む両国国民は、歴史が育んできた共通の「文化」と各自の「個性」を尊重しつつ、「共存」する未来を共有する意志を持ちうるし、歴史研究者としてそのために努力せねばならない、とわたしたちは考えます。

わたしたちが憂慮しますのは、対立した現状のまま事態が推移すれば、両国間に狭隘なショーヴィニズムの「対抗状況」が醸成されかねないことです。度重なる戦争の悲惨を経験してきた国際社会は、対立紛争を「武力」によってではなく、平和的に解決する手段として国際平和機構、すなわち国際連合や国際司法裁判所を作るという智慧を示してきました。わたしたちは、無数の失われた生命の犠牲の上に成立した、理性と知恵によって解決するこのシステムの活用を両国は尊重すべきであると考えます。

忌憚なく語り、議論し、武力を交えることなく、共存を目指して「対話」を繰り返していくこと、それで不十分であれば国際的な解決システムを活用することを両国政府、民間諸団体、および両国国民ひとりひとりに強く訴えたいと思います。未来は腹藏なく語り尽くすことによるのみ開かれます。わたしたちは「理性」と「ことば」の

もつ「力」を信じ、歴史を母として互いに平等に平和裡に共存できることを願うものです。

わたしたちは、かねがね、友人各位の高い知性と深い見識を衷心より尊敬してまいりました。わたしたちは、理性的な対話と平和への志向を維持すべく、両国民の反対感情が不可逆的な状況にまで立ち至らぬよう、それぞれの領域において忍耐強く努力し続けることを訴えます。

以上、私たちの拙いメッセージをしたためました。意のあるところをお汲み取り下さるとともに、ご意見がございましたら率直にお聞かせいただきたく存じます。

先生のご研究の進展と更なるご健康を祈念して筆を置きます。

注。呼びかけ人は日本の中国史研究者である以下の7名である。森正夫、浜島敦俊、狭間直樹、久保田文次、多田狷介、佐藤公彦、小林一美の7名連名（中国人等内外の友人三百数十人に発信）

2013年2月19日

③上海在住の中国人女性（筆者小林の友人、知識人）の「微博の友」（メル友）に掲載しても頂いた。（発信者は小林一美、2013年4月7日付け）。

『中国の友人の皆様へ』

—「尖閣列島」に関する国際紛争を憂慮して呼びかけた「7人の日本人・中国史研究者」の1人として、皆様の御意見に私一個人の責任で答える—

小林一美（Kobayashi Kazumi）日本国神奈川県横浜市在住、75歳、1937年生れ。2013年4月7日記。（注、前記②の「呼びかけ文」に対する中国人の批判に答えた私の文章。総論だけを紹介する。全体の2分の1は省略した。日本語と中国語で発信。全文を中国の友人のブログに掲載して頂いた）

第1部、上海の私の友人のブログ「微博」の波紋

(小林評) 科学や学問に携わる人は、国家・階級・民族・地域の垣根を越えて発言し、行動する責任があり、そうすることが「学者の使命倫理」でしょう。世界中の多くの学者・技術者・思想哲学の恩恵を受けて、人類は新しい時代を切り開くことが出来たのです。だから、学者は自国の政府・権力者を絶えず批判して、人類普遍の立場に立つ必要があるのです。私も、戦後の日本が一貫して平和的だったとは思っていません。近い将来に、石原某、橋本某のような右翼の大衆扇動家が国家の主導権を握り、極めて好戦的な政府を作る可能性があります。現に自民党政権は憲法改正を日程にあげており、石原は核武装を主張しています。日本人は、日中戦争を起こしたことに対する自己批判が不足していると言う批判は、その通りだと感じます。日本の小・中・高の教科書に、近代の日本の戦争史は十分記されてはいませんし、歴史家の「日中戦争史研究」が極めて不十分であることも大いに反省すべきことです。ですから、私は、一日本人としての国家や国民を名のって発言することに大きな抵抗を感じます。あらゆる国家は、周辺にある他の国家、民族、共同体群にたいして敵対し、競争し、戦争し、屈服させて自己を強化しようとする本性を持つものです。実際に総ての歴史上の国家がそうしてきました。国家は戦争・準戦争状態によって自己を唯一正当化し、国家共同体幻想を保持し再生産する本質を持っています。従ってあらゆる国家は強力な常備軍と軍事的官僚制を絶えず保持・補強し続けるのです。国家が国際的な規模で消滅し、世界連邦政府・世界共和国の誕生によって戦争が無くなった時、諸国家の対抗・競争によって起る戦争の原因である領土紛争もまた根本的に解決することができるでしょう。武力革命なしに、国家をより高い水準で克服し、消滅させることが理想です。その時に、また諸国家内の文化は、より地域・大地に根差した文化として復活し、世界的規模で発展すると信じています。世界遺産の認定と保護、国際連盟や国際連合、国際機関の設立は強大な国家が主導して作ったものではなく、世界戦争の驚くべき破壊と虐殺に多くの関係者・被害者たちが苦悩し反省して、それに世界人民が賛成して実現したもので

す。しかし、これにも大きな限界がありました。米ソ中英仏の5大国が、「国連常任理事国5カ国」という特権を保持すると云う取引で賛成したのです。戦後の日本では、1945年の敗戦から1970年代終わりまで、反戦運動、市民運動、農民運動、労働運動、住民運動、護憲運動、学生運動等々が極めて盛んでした。こうした方面の日本人の努力の歴史を私達は評価したいと思います。しかしそれ以後、日本では1990年代以降今日まで、国家と資本とネイションの3者は次第に分裂し、グローバル経済・新自由主義の下で社会の中間勢力、中間階級、協同組合組織、農村共同体「村」が解体されました。その為、日本の企業共同体、農村共同体は消滅し、国民は散沙の様にバラバラになり、国家が1000兆円の負債を持つと云う国家財政破綻を招きました。政治家は国民に媚び、放漫財政による人気取り政治を行うと云うポピュリズムが横行する危険な状態になっています。

■革命や戦争の可能性について、歴史的事実を分析してみましょう。戦争は、国民投票で決めて実行されるものではありません。第一次世界大戦、ロシア革命、中国革命、ナチス独裁、日本の満洲事変、蘆溝橋事件、朝鮮戦争、中越戦争等々、これらは大多数の国民の合意や意思とは関係もなく引き起こされました。例えば、朝鮮戦争はキム・イルスン、スターリン、毛沢東の3人の合意で実行されました。建国直後の中共政権には毛沢東以外に北朝鮮軍の南侵に積極的に賛成した人はいなかったと聞いています。南北朝鮮の民衆の大多数も、朝鮮戦争の勃発を予想していませんでした。また、革命・反革命の多くはボルシェビキ党、ナチス党、ファシスト党等々の少数派である独裁政党によって実行されました。多くの国民は、ほとんど何も知らない状況の中で戦争は勃発し、革命は遂行されたのです。また第一次世界大戦は、いったいなんであるような恐るべき世界戦争になったのか、今でも原因がよくわかりません。このように、革命とか戦争は、多くの偶然が積み重なってあるベクトル（政治的雰囲気と方向性）が選択されて、国家を戦争に突き動かす衝動的必然に転化し、ある日に突如として発現するものなのです。日本の中国侵略とアジア太平洋戦争への道に

は、5・15、2・26事件、柳条湖事件、蘆橋溝事件など、極右的な一部の軍人・青年将校が起こした突発的の事件が重なり、ついに大侵略戦争に突入しました。アメリカ人は、9・11事件で3000余人がアルカイダ(al-Qaeda)に殺されました。それで激怒したアメリカ人は直接関係がないイラク・アフガニスタン戦争を起こし、以後10年も戦争を続けています。このように見て来ると、「戦争」への道は遠くにあるようで、実は今の日常的諸事件の中に潜んでいると思うのです。日本でも、中国でも、突発的な「事件」が重なり、思いがけない戦争に突入する可能性を忘れてはいけません。私は日本人の一人として、多くの原水爆を持ち、空母を作って軍備拡張に邁進する中国政府に脅威を感じています。また、尖閣列島を「国有化」した日本政府のやり方は、拙速すぎたと感じます。しかし、日本では「国有地」と「民有地」の違いにそう意味があるとは考えられておりません。成田国際空港の敷地内にいた数軒の農家は、50年間も立ちのきを拒否して抵抗しました。その為、政府は成田空港に滑走路を一本しか作れなかった歴史もあります。日本には、戦争を避けるためなら「完全に武装放棄の宣言を行い、尖閣列島を中国に贈与して、世界史上最初の、この革命的壮挙による国際的名誉を独占せよ」と主張する高名な思想家もおります。私もこの遠い理想を追い求めたいと思います。

■日本の3・11の「福島原発事故」以後の世界を見るに、21世紀には1世紀以来創られてきた「資本=ネーション(共同体)=国家」という国民国家とそれから始まった帝国主義体制を乗り越える必要を感じます。イヤそれは既に堰き止められない勢いです。国家と資本と社会の大きな乖離こそ、新帝国主義戦争の時代を開くのです。それと闘うには、国際連盟を強化し、NPO、NGOを世界中に発展させ、資本と国家を消滅させるのが唯一の道であり、これこそが領土紛争を解決する最終的な道です。中国にも可能性があります。政治局常任委員も、中央委員も、毛沢東時代の「打倒米国帝国主義」のスローガンを全く捨てて、アメリカに多くの財産と子弟を送って、世界でも珍しい「親米国民」になっているのですから、「冷戦

時代」の昔を知っている私には夢のようです。日本に来る留学生の大多数は、アメリカ大好きです。私のような青年時代からアメリカを批判してきた世代には、この中国人の変わりようは驚きですが、こうした人的物的交流、及び政治と経済の交換によって、世界連邦・世界共和国成立の現実的基盤が形成されつつあると感じます。ちなみに、私はアメリカに一度も行ったことはありません。一度は行ってみたいのですが、間に会いますかね。「米中人民の交流」こそ、新しい世界を切り開く王道です。より多くの中国共産党の幹部とその子弟がアメリカに行き、人と財産を移転することを支持し、またその結果に期待します。もちろんこれには貧しい中国農民による「倫理的非難」は避けられないでしょうが。人類は、いまこそ国家や民族の壁を越えるべきです。私が加入している国際組織(もう集会にも日常的な活動にも参加せず、機関誌をとり、小額のカンパをするだけです)は、「国境なき医師団」、「パレスチナの子供たちキャンペーン」、「国連UNHCR協会」、「ユニセフ」、「難民支援を支援する会」、「強制連行に反対する会」、「ノウ・モア南京」等があります。これらの国際組織には多くの日本人が参加しております。中国にも、NPO、NGOがたくさん生まれ、年々民衆の活動が強化されつつあると聞いており、隔世の感です。暴力なき国際支援の運動と国家権力に抵抗する人民の国際的連帯にこそ希望があります。というよりも、これに希望を託す以外に人類に選択の余地はありません。中国でも一党支配、一党専制の政治をやめて、自由と民主の社会を作ることが必要だと思います。互いに自由に「領土問題」を議論したいものです。

■20世紀の世界史を振り返ると、レーニン、スターリン、毛沢東の「国家を階級闘争と社会主義権力の樹立で消滅することが出来る」とする理論は、全くの誤りであったことは明らかです。ロシア革命、ベトナム革命、カンボジア革命等は、国家を消滅するどころか、革命権力を防衛するために、以前より強大な国家権力を樹立することになりました。その結果、帝国主義の干渉戦争を呼び起こし、また国内で多くの人民と少数民族を敵として抑圧・殺害しました。ロシア革命、中国革命

は、旧ロシア帝国、旧中華帝国の矛盾（専制主義と少数民族抑圧、帝国主義の侵略）を階級闘争で克服する目的で行われましたが、帝国主義と反革命を鎮圧するために前代の旧帝国よりも強大な専制権力を打ち立てたのです。中国は毛沢東時代には階級闘争至上主義、それが大失敗すると今度は、国家官僚資本主義に180度転向しました。しかし、「静かなる監視型暴力」の長期的展開という結果を生んでいます。では、どうしてこのような事態が生まれたのでしょうか。なぜソ連の崩壊、ロシアの復活と中国の180度の旋回が可能になったのでしょうか。それは、1970年代のベトナム戦争の敗北以降衰退し始めたアメリカ・ヨーロッパの巨大資本が中国・インド・西アジアに新しい市場と資源（安価な労働力を含む）を求めてなだれ込むようになったことに主要な原因があります。このことが、ソ連と毛沢東中国の崩壊と、以後の両国の180度の転向を可能にさせ外的原因でした。内的原因は、階級闘争による社会主義の実現に完全に失敗し、国民生活は疲弊し、少数民族政策は失敗し、国家社会が立ち行かなくなったためです。これが内的原因です。しかし、1980年代以降に世界史の中心に再度登場したアメリカ、新興国家ロシア・開放中国に未来を切り開く理想も威力も見つけることは不可能です。これらの国々は世界市場の新たな争奪戦を始めたのです。ヨーロッパ共同体にはまだ可能性が残っていますが、アメリカ、中国、ロシアには、世界資源・世界市場の争奪戦が待っています。新しい特徴は、もはや国際金融市場が、国民国家の枠をほぼ完全に離脱したと云うことです。ロシアと中国の官僚資本主義は、資本を国家に従属させようとして苦心していますが、「国家＝ネーション＝資本」の三位一体を守れば、国際資本市場の競争に勝てないことは明白です。しかし、アメリカ帝国の衰退という間隙をぬって、中国、ロシア、インド、イラン、更には北朝鮮までが国家を強力にして「新帝国主義」による世界分割競争を始めるようになりました。1980年代からのアメリカ帝国の衰退とともに、新しい帝国主義の時代が始まったと言ってもよいでしょう。

■近代世界史を振り返ると、近代戦争の破壊力は

驚異的なものになり、その損害は想像を絶するものになりました。そこで「ウエストファリア条約」（1648年、Westphalian Treaty、「主権国家の独立」を国際的に初めて承認）が締結され、またドイツの哲学者カント（Immanuel Kant, 1724～1804）が「永遠平和のために」を書いて、世界共和国に向けての哲学を語りました。しかし、それ以後、戦争はますます巨大化して労働者・人民・諸国民を苦しめました。その為、社会主義者・無政府主義者は、第一次、第二次、第三次、第四次と四回にわたって「インターナショナル」（international 国際共産）を創建しました。更に、20世紀に入ると、人類未曾有の悲劇を生んだ、世界戦争が二度も起こりました。その巨大な人的物的損害を反省して、第一次世界大戦後に「国際連盟」が、第二次大戦後に「国際連合」が誕生したのです。これ以後、現在の諸国家の力を削減して、国際機関、国際協力で民族紛争、領土紛争、国家間の紛争を回避する方向で、世界の人々は努力することが常態となり、また着々と成果をあげてきました。私は、尖閣列島を日本の永久に自国の領土にすることに何らの価値を認めません。領土紛争を国際的な機関で解決すること、更には世界連邦、そしてついには「世界共和国」を創建するという高い理想をもって生きたいと願っています。21世紀は、そうした理想、理念が実現するものと大いに期待します。